

## 「哲学ゼミ（読書会）の招待」

学習センター客員教授 立花 希一

2004年10月27日、水曜日に第一回目の哲学ゼミを開講してから、今年で丸6年を迎えた。哲学ゼミといっても、ゼミというより、むしろ「読書会」、「輪読会」である。事前の読書、予習は要求されない。一回に読む量も決めていないし、関連する事柄への関心から、別の作品やテーマに脱線してもかまわないという自由な形式で行ってきた。参加の出入りも自由で、参加者が一番多かったときで10名、現在は4名である。

テキストも参加者の希望によって決めていたので、何でもかまわなかったのだが、最初に取り上げた作品は、17世紀を代表する思想家のひとり、スピノザの『神学・政治論』にした。テキストは、手頃な価格で入手できる文庫本から選ぼうと考えていたが、久しく絶版になっていた『神学・政治論』が、ちょうど2004年春に復刊され、入手可能になったからである。

実はもうひとつの理由があった。スピノザの主著は『エチカ』だが、学生時代にそれを一瞥して、面白くなかった経験があるので、以来、スピノザを忌避していた。しかしながら、『神学・政治論』はまったく違っていた。近代民主主義の理論家といえば、普通、ロックが挙げられるが、ロック自身は民主主義者を標榜していたわけではない。ところが、スピノザは、民主主義者であることを明言していた。スピノザが近代における最初の民主主義者といっても過言ではない。因みに、翻訳では、「聖書の批判と言論の自由」という副題がついている。

翻訳者の畠中尚志氏は、これを戦前の1944年に出版したのだが、軍国主義に異議を唱え、民主主義を擁護するために、この本に「言論の自由」という副題をつけたのであろう。言論の自由（批判の自由）は民主主義の根幹だからである。

岩波文庫の訳で、上巻290ページ、下巻307ページ、合せて597ページの大著である。哲学書はどれも難解で、ひとりで読破するのは、はなはだ困難だ。しかしながら、グループで少しずつ読み進めていくと、いつかは読了できることを、このゼミで、われわれは身をもって体験することができた。昨年の12月、5年の歳月をかけて、とうとう『神学政治論』を読み終えたのである。ささやかながら、読了を祝う会も行った。

さて、昨年12月から、ようやく二冊目のテキストになり、それは現在も続いているのだが、ジョージ・パークリの『ハイラスとフィロナスの三つの対話』（岩波文庫、735円）である。パークリは、哲学史の通説では、イギリス経験論に属するとみなされるアイルランド生まれの哲学者で、英国国教会の僧正（bishop）でもある。かれは、当時、古代ギリシャの原子論の復活によって台頭してきた唯物論や無神論、懐疑論に對抗し、独自の認識論に基づく「非物質論（immaterialism）」を唱え、キリスト教の護教論を展開した人物である。主著には『人知原理論』があるが『ハイラスとフィロナスの三つの対話』は、その内容を対話の形式でより分かりやすく説いた作品である。

第一対話を読み終え、現在第二対話に入ったところである。この本では、「そもそも物質は存在するのか」というひとつの中心問題がいろいろな角度から再三再四論じられているので、途中からの参加でも、フォロー可能である。

この「哲学ゼミ」は、正式の授業ではないので、当然、単位にはならないが、現役生ばかりでなく、同窓生の皆さんに対しても開かれている。関心のある方は、是非、声を掛けていただきたい。